

平成30年度
地球環境『自然学』講座
第4回

テーマ
「宮崎県椎葉の山奥で焼畑を続け、源流域を守る」

講 師

椎葉焼畑蕎麦苦楽部 代表

椎葉 勝 先生

平成30年5月26日
認定NPO法人・シニア自然大学校

講師プロフィール

椎葉 勝（しいば まさる）



椎葉村向山日添出身 64才

焼畑継承者で民宿「焼畑」を経営

30才前に離村し島根県出雲市に移住し19年前に帰村

地域おこしの為に14年前に「焼畑蕎麦苦楽部」を結成 代表を務める

10年前に「まち」「むら」交流施設焼畑粒々飯々共同作業体験場を建設

年間300人前後の体験や学習を提供

猪や鹿などとの共存を目指し、栗15000本や桜5000本などを植樹するなど
エサ場を提供することによって田畑の被害激減に成功

モットーは「山は友達 命の源」（命水は山から）

山は友達・命の源
～続けることが力～

焼畑蕎麦苦楽部

(宮崎県椎葉村)



- 生い立ち
- 焼畑とは
- 人とのつながり
- 食の原点
- 四季を感じる森づくり・水づくり
- 後継者育成
- 地域おこし

山は友達 命の源 （椎葉勝手記） 『源点へ ～足元をみつめる・焼畑の火を消さない～』

ここ5～6年程、8月上旬は雨続きだ。一昨年は火入れの時機を逸し、山が燃えずそば収穫は皆無であった。自然に逆らっても良い事はない。山の神様は見通している。私は山がカラカラに乾き、入れた火が勢いよく燃えさかる光景を想像しながら、厳しい作業を続ける。

私が住む宮崎県椎葉村では、かつて焼畑が盛んだった。九州のちょうど「へそ」の位置にあり、標高は高いところで900mほどである。四方を険しい山に囲まれた土地では、平地も少ないため斜面でもできる焼畑だけが生活を支える手段だった。しかし、今では毎年行うのは全国でも私の家だけになった。山を焼くのは大体7月下旬～8月上旬にかけてだ。「これより、このやぼに火を入れ申す。蛇、蛙（わくと）、虫けらども早々に立ち退きたまえ。山の神様、火の神様、どうぞ火の余らぬ様、また焼け残りが無いよう御守りやってたもうり申せ。」。

「やぼ」は焼畑地、「火が余らぬよう」とは、山火事にならないようにという意味だ。この祈りはずっと昔から伝えられてきた。18年前父母から焼畑を引き継いだのと同時にこの言句（いいく）を唱えるのも私の役目になった。

火は風向きにもよるが、山の斜面の上からつけ始める。3分の2位まで燃えたら、下から迎え火を入れる。こうすると、途中で火と火が合わさり自然に消える。この時、消える前の炎は上昇気流によって壮観な光景となる。焼くことで土に含まれる窒素や燐が増え土地が肥える。害虫や細菌も死滅する為、農薬も必要ない。1年間は無菌状態である。その為、そばと一緒に播いた平家大根や平家蕪は甘く、辛く、うまい。種まきの後は水もまかない。収穫までは自然の仕事だ。焼畑が原始的な農法と呼ばれる所以だ。

一度に焼く面積は0.3ha（3反）～0.5ha（5反）程度だ。1年目には成長が早く、75日で食べられるそば、2年目には稗や粟をまき、3年目には小豆・大豆を育てる。この方式を年々違う場所で行い、少しではあるが自然の恵みを受け取る。1度焼いた場所は、20年～30年は手を付けず森に戻す。最近焼いている場所は、25年以上前に焼いた場所だ。炎と煙の勢いがさまざまに山火事と勘違いされる事もある。風を読みながら火を自在に操るため

には経験が必要である。

今では日中に火入れを行うが、私が子供の頃は夜でも行うのが当たり前だった。夜は温度も下がり炎が弱くなる為だ。また、焼畑を行う上で最も悩ましいのが天気である。明日は雨かもしれないと判断した場合には前倒して火入れを行う事もあれば、予定していた火入日から何十日も遅れることもある。10月下旬には霜が降り始めるため、一定量のそばを収穫するためには、8月中旬頃までに山を焼き終えなければならない。焼畑とはまさに自然との共生が必要不可欠なのである。

私は今でこそ、父母から受け継いだ仕事に誇りを感じているが、若い頃は焼畑などに関心も興味も全くなかった。山しかない、道路も家までも通っていない閉ざされた土地、限られた人間関係、古い習慣、封建、全て煩わしく思えた。いつかはこの土地から出たい思いが強くなった。下宿生活だった高校卒業後、村に戻り結婚はしたもののその思いは消えなかった。29歳だった。焼畑を継げという父母と大げんかし妻子（5人）を連れて家を出た。島根県出雲市で長距離のトラック運転手になって17年間暮らした。東北から鹿児島まで全国をまわり山の中では知ることのなかった世界を見る事が出来た。

父が倒れたという知らせを受けた時に帰る気になったのは、日本海側、太平洋側、瀬戸内海側とそれぞれの土地で、それなりに自分にふさわしい生き方を続ける人達に出会ったからかもしれない。積雪2m以上の所で暮らす人、寒風吹きさらす海岸沿いで暮らす人を見て自分にもそれなりの暮らしがあるのかもしれない、そう素直に思えた。

焼畑は、しばしば自然破壊や大気圏破壊などと結びつけて語られる。しかし実際には食の原点であり共生する農業だと私はつくづく思う。山を焼くためには、秋から冬に、また春先に山に入り雑木や下草を切り、燃えるための段取りをしなくてはならない。大径木等は搬出をしなければならず大変な作業である。どんなに苦労や重労働をしても結果として報われる事は少ない。だからこそやる人がいなくなったのであろう。焼畑が行われなくなった土地は拡大造林等で、国有林を問わず民間の山々も針葉樹の山に置き換わった。おかげで昔は秋に色とりどりの表情を見せていた山々は、今でも季節を問わず緑一色だ。標高1500m位の所まで杉や桧が植えており寒冷地に本当の良質材は育つのだろうか。雑木林（住処）を失った動物達は、人里にまで下りて作物を食い荒らして

いる。全国の山の民達が抱える悩みだろう。しかし、猪や鹿だけが悪いのか。山は人間だけのものなのか。人間がどんな防護をしようとも食べるためだけに生きている夜行性の原住民には勝てるはずがない。動物に山を返す努力をしないと、いつまで経っても同じ事の繰り返しである。今は昔と比べると猪肉や鹿肉が旨く無くなってきている。針葉樹の山には食べ物が何も無いからである。特に猪肉は、椎葉の民謡「ひえつき節」に歌われている「ひえ」を素にした「稗ずーしー」にはなくてはならない脂身である。今は主食であった稗も陰をひそめている。今私達は、椎葉山民の主食であったひえ（他の雑穀）の復活を目指している所である。稗を作らず食べなくなった椎葉の民はこれでいいのか。広大な山々、荒れた田畑にひえを蒔き食べるべきである。

私達は、一昨年よりいろいろな催しの場で稗ずーしー「稗粥」を出し始めた。ところがその味に、食べた全ての人達が感動してくれた。想像以上に喜んでくれた。（小さな子供も）この時、私は食の源はこれだ。稗が日本人に本当に合っている食べ物ではないのかと感じた。その稗について、最近稗の効能がすごい力を持っている事が分かってきた。その実証が、村の長寿者達である。この人達は、稗飯を食べていたから今があるのではないか。色々と効能がある中で、一番は「女が欲しくなる」「男が欲しくなる」成分が含まれていると言う。本当に驚きである。稗が村を救う一つの鍵ではないのか。今、椎葉村はもとより全国的に少子高齢化の時代である。村民は子供や孫達を連れ戻す努力をする必要がある。そして帰って来たい村づくりをする工夫がいる。若い世代を連れ戻し、移住者達を引き込む知恵を出す必要があるのではないか。

世界農業遺産とは、そこに住む人が居て生業にしているからの農業遺産である。人が居なければ何もならないのである。とにかく椎葉の山々は宝の宝庫である。それを生かすも殺すも村民一人一人の想いである。椎葉はいつまで経っても日本の源風景、ど田舎でいいのである。もうそろそろ足元を見る時が来ている様な気がする。

私が焼畑を続けるのは森づくりであり水づくりである。かつて村にあった自然豊かで幸せな共生関係を取り戻すためでもある。私はここ20年近くで杉山・桧山を切り、代わりに栗6000本、山桜1500本、欒や水檜など花が咲いたり実がなる木を植えている。もちろん杉や桧も少しは植えている。モザイク林も見えていいからである。栗は3年目から実を付ける。おかげで稲刈り前

に田んぼに来ていた猪が来なくなった。ちょうどその時期に実が落ちるからである。昼は人間が拾い、夜は猪が食べ、そして肉が旨くなる。その森づくりが被害を防ぐ効果を実証している。山に住む人は、四季を感じる森づくりをしなければならぬ。美味しい水づくりをしなければならぬ。そして、椎葉独特の雑穀をもっともっと生かしていかなければならぬ。地元にある豊富な山菜や野草をもっと有効利用しなければならぬ。その地に住む人が居る以上、お互いが知恵や汗を出し合い、全てにおいて村の良さを発信すべきである。世界農業遺産は、椎葉村民が長い間伝統を守ってきたこと、そして今からも細く、長く、次世代に受け継いで行かせる為に認定していただいたものだと思ふ。

私にとって山は友達であり、命の源でもある。春は桜・新緑、秋は紅葉、そしておいしい水、食べ物、人々のあたたかさや優しさがあれば椎葉には都会から多くの人々が押し寄せてくるはずである。そうする事が今を生きている私達の務めではないだろうか。それが地域おこしであり村おこしでもある。今、山に感謝し自然と相向き合いながら生きる。そんな暮らしを次世代にも繋げていくために焼畑蕎麦苦楽部の部員と共に守り続けていきたい。

焼畑蕎麦苦楽部 代表 椎葉 勝

焼畑蕎麦苦楽部構成メンバー ～小さな粒々飯々に秘められた大きなパワー！～

代表	椎葉 勝	63歳
副代表	椎葉 義光	61歳
副代表	椎葉 調一	61歳
会計	椎葉 竜也	34歳
部員	甲斐 孝規	44歳
部員	椎葉 ミチヨ	64歳
部員	椎葉 キク子	60歳
部員	甲斐 美恵	42歳
部員	青木 優花	39歳